埼玉大学紀要　教育学部，58(1)：137-149（2009）

少人数学級に配属された中学生の学級認知
—少人数学級効果の分析視点の抽出—

馬場　久志*

キーワード：少人数学級、中学生、学級生活

Ⅰ　問題と目的

小・中学校の教員配置を弾力的に運用し、いわゆる少人数学級を設ける動きが各地で見られる。少人数学級の試みは、子どもへのより細やかな指導が可能になるとして、保護者や教員の期待は高い。だが、少人数学級によってどのような成果が得られるのかについての実証的研究はまだ少なく、十分な客観的評価がなされるには資料が足りていない。学習成果などでの明示的な集団差は個別の学習単元で見いだされることはあっても、一般化できるものにはなっていない。

その原因は馬場ら（2007）にも述べられているとおりであるが、要するに、「少人数学級」には様々の背景をもつものがあって一般化が容易ではないこと、少人数学級の利点として多くのことが念頭に置かれていても実証データとしては学力成果に絞られがちであることなどが、あげられる。文部科学省により設置された、教職員配置等の在り方に関する調査研究協力者会議も「少人数教育については、様々な教育環境に適合させながら実施されるものであり、全国的に実証データを収集・分析することは難しい面もある」と指摘している。（同会議、2005）

だが、実証研究の知見が明確に得られていない現状においても、当事者である教員の少人数学級への期待は高い。文部科学省が2004年度に少人数指導または少人数学級を実施した各学校に対して行ったアンケート調査結果は、表１の通りである（教職員配置等の在り方に関する調査研究協力者会議、2005）。児童生徒の学習や教員の指導力においては少人数指導も少人数学級も効果が感じられるが、生活面では少人数学級により効果が感じられるということなど、順当といえる結果になっていてそれ自体意義深い結果を示しているが、注目するべきは末尾の項目である。少人数指導に携わった教員に少人数学級を導入するべきか否かを、また少人数学級に携わった教員に少人数指導を導入するべきか否かを問うている。その結果は明らかで、前者は肯定反応がかなり多く、後者は否定反応が比較的多くなっている。つまり両者ともに少人数学級への期待がみられるということである。

少人数学級への期待が高いということと、実証データの乏しさという実態の乖離は、少人数学級のもたらす効果についての分析視点の乏しさからくるものと考えられる。当事者の実感による評価の高さを考慮すると、少人数学級に対しては、異なる視点の開発による評価を試みる

* 埼玉大学教育学部教育心理カウンセリング講座

必要があるということが示唆される。

本研究の目的は、学級再編制により少人数学級に所属することになった生徒に対して、約半年間を経て行った面接調査の結果を検討し、そこから少人数学級の効果を分析する新たな視点を抽出することである。

表1　少人数教育の効果（平成17年4月文部科学省調査）

（教職員配置等の在り方に関する調査研究協力者会議、2005）

○少人数指導　(%)

区分		小学校				中学校			
		とてもそう思う	そう思う	あまり思わない	全く思わない	とてもそう思う	そう思う	あまり思わない	全く思わない
学習	総じて児童生徒の学力が向上した	26.5	72.7	0.8	0.0	13.2	83.0	3.8	0.0
	授業につまずく児童生徒が減った（学力の底上げが図られた）	34.3	64.2	1.5	0.0	16.3	79.1	4.6	0.0
	発展的な学習に取り組める児童生徒が増えた	14.9	72.9	12.2	0.0	10.1	73.1	16.8	0.0
生活	不登校やいじめなどの問題行動が減少した	6.5	57.4	36.1	0.0	5.5	37.7	55.7	1.1
	児童生徒の基本的な生活習慣が身についた	6.5	59.0	34.1	0.4	2.9	53.4	43.5	0.2
指導方法	教師間の連携により指導力の向上や教材研究の深化が図られた	33.9	62.5	3.6	0.0	22.2	70.0	7.8	0.0
	教師間の打合せや教材準備の時間が確保できない	12.6	60.8	25.6	1.0	15.9	53.0	28.2	2.9
その他	実施拡大のために教室などの増設が必要	31.9	33.1	30.0	5.0	25.3	37.1	34.5	3.1
	学級編成人数を引き下げた方が効果的である	43.4	38.4	17.2	1.0	48.8	37.2	13.6	0.4

※平成16年度に少人数指導を実施した学校から抽出した小学校477校、中学校478校へのアンケート調査結果

○少人数指導　(%)

区分		小学校				中学校			
		とてもそう思う	そう思う	あまり思わない	全く思わない	とてもそう思う	そう思う	あまり思わない	全く思わない
学習	総じて児童生徒の学力が向上した	28.5	70.2	1.3	0.0	16.4	77.7	5.9	0.0
	授業につまずく児童生徒が減った（学力の底上げが図られた）	35.6	63.1	1.3	0.0	20.1	77.2	2.7	0.0
	発展的な学習に取り組める児童生徒が増えた	13.6	72.6	13.8	0.0	5.5	77.5	17.0	0.0
生活	不登校やいじめなどの問題行動が減少した	31.6	57.3	10.8	0.3	20.5	56.6	22.4	0.5
	児童生徒の基本的な生活習慣が身についた	31.4	59.3	9.0	0.3	10.6	67.4	22.0	0.0
指導方法	教師間の指導力の向上や教材研究の深化が図られた	22.4	69.8	7.5	0.3	16.2	68.5	15.3	0.0
	教師間の情報交換が低調になり連携協力が図られていない	0.5	2.3	44.1	53.1	0.5	3.7	54.1	41.7
その他	実施拡大のために教室などの増設が必要	28.5	36.3	23.1	12.1	20.0	32.0	32.0	16.0
	少人数指導・ティームティーチングの方が効果的である	14.7	15.9	54.2	15.2	18.3	23.9	50.5	7.3

※平成16年度に少人数学級を実施した学校から抽出した小学校390校、中学校219校へのアンケート調査結果

Ⅱ　少人数学級研究プロジェクトについて

本研究の面接調査は、平成18年度文部科学省委託「教員配置に関する調査研究」の一部として行われたものである。この研究プロジェクトのために、本学教育学部附属中学校では第１学年の４学級各42名を前期終了時に編制替えし、後期の半年間は42名２学級、32名２学級、22名１学級として、生徒及び教員の意識と行動のデータを収集した。主な収集データには、a)生徒への質問紙による少人数学級編制前後の学習観・学習方略、ストレス要因・反応、道徳性発達、学級満足度の測定、b)教員への同じく質問紙による教師効力感、ストレス反応の測定、c)授業場面の録画による言語・非言語相互交渉と学習過程の記録などがある。面接調査は、事後調査の一つとして実施された。

このプロジェクトはいくつかの特長をもつ。（馬場ら、2007）第１に、同一校内での学級比較なので従来の研究で排除できなかった背景的要因を考慮する必要がない。第２に少人数学級実施前後の変化を分析できる。第３に、学習などの成果以上に活動や人間関係の過程の特徴をとらえようとしたことである。そして第４に、生徒側の諸特性、生徒同士や教師との関係、学級の物理的・心理的環境の有機的関係の中で特徴をとらえるという、日々の学級生活の日常性に即した分析となっていることである。

これらの特長の特に第３、第４を体現するものとして、事後の面接調査が位置づけられている。少人数と他とどちらか優れているかという単純な議論では見落とされがちな、より現実的な少人数学級のよさをとらえることができると考えられる。

Ⅲ　方法

1　面接調査の設定

本面接調査は、少人数学級研究プロジェクトの一環として、少人数学級での約半年間を経て第１学年を終えた時点での生徒の認識を探索的にとらえる手段として企図された。

面接の性格が、生徒個人の内面の理解という臨床的面接というよりは、他の生徒の発言に触発された一種の手がかり反応も期待される情報収集であるため、小集団形式も含めた談話形式の面接調査とした。

学級生活全般にわたり少人数学級分析の手がかりとしたいという意図や、授業観察の結果などをふまえ、質問は次の観点を含むものとした。

①最初の印象
②授業場面
③授業以外の活動
④友人などの人間関係
⑤生活・学習環境
⑥今の選好あるいは総評

2　手続き

面接は2007年３月22日および27日に附属中学校教室で行われた。

少人数配置の30人学級と20人学級に所属する生徒に面接への参加を募り、これに応じた生徒を対象に小集団面接（時間の都合により個別面接）を実施した。参加生徒は以下の通り。

30人学級14名（２学級計65名のうち）
20人学級12名（１学級23名のうち）

面接時間として、30人学級２学級と20人学級１学級の計３学級に対して２つずつ、計６つの時間枠が設けられ、それらの時間に同じ学級の１名から９名の生徒が集団となり、面接者１名と約30分間の面接を行った。

面接の進行は、概ね面接者が誘導し生徒の発言に相づちを打ちながら他の生徒の発言を待つという形態で進められたが、面接者の質問文や質問順序などは細部にわたり形式化されたものではなく、セッション毎に回答者の関心に応じて展開することとした。

参加者の了解の元に、会話はＩＣレコーダーに録音され、また補助記録手段としてビデオカメラでの録画を行った。

なお、各学級の生徒数は編入学生徒などのため年度中に少々の変動があり、実際には42～44名、32～33名、22～23名で推移しているが、本論文では学級編成の趣旨から40人学級、30人学級、20人学級と表記することにする。

Ⅳ　結果

1　分析方針

本研究においては、生徒個人の意識の変化を追うということでなく、生徒たちの独自の立場から意識された少人数学級の特徴に着目することによって、少人数学級の評価に生かせる視点を得ることに目的がある。この趣旨から、個々の生徒ごとに発言を整理することはせず、20人、30人という学級規模を単位として上述した観点で発言を整理し、分析を加えることとする。

また、少人数学級として30人学級を対象に含めることについて吟味する。「平成20年度学校基本調査速報」（文科省、2008）によれば、日本の中学校の１学級あたり生徒数は約30.0人であり、小学校児童数では約25.6人である。知られているように、これはOECD加盟国の平均値を上回り、小中学校とも世界で屈指の多人数学級となっている。この数値から見ると30人学級は平均的規模の学級ということになるのであるが、多くの地域で少人数学級として35人や30人の学級定数すなわち生徒数の上限が論じられている実状に鑑み、30人学級を少人数学級として分析を行う。ちなみに本調査の対象校は通常約40人の学級定足数を満たした状態で運営されているため、生徒や教員にとっては30人の学級規模は「少人数」と映っており、実際、面接の中で「（座席が）１列変わるとすごい変わる」「（パワーが）全然違う」との印象を述べている。

2　調査観点ごとの結果の特徴

①最初の印象

多くの生徒は、20人や30人の学級配属に違和感や拒絶感をもった。これは多分に環境の変化への抵抗感のためであることは、翌年度に40人学級に戻ることにも同様に感じていることから推察される。

注目されるのは、10人しか少なくない30人学級でも、違和感とともに「全然違う」などと述べる生徒が少なからずいた点である。さらに30人学級の場合は、その後の選好について、30人と40人とに分かれていることが、ほとんどが現状がいいとした20人学級の生徒と比べて異なる。机の配置では縦列が40人学級と同じであるし、全体でも10人の違いでしかないと外部からは見られがちな30人学級も、子どもにとっては十分に「少人数」であり、さらに20人とは異質の少人数であるということを、分析においてはふまえなければならない。

その他のさまざまなとらえ方については、表２に示された通りである。

②授業場面

少人数でやっていくのは厳しいのではないかとの見方を持った生徒が大多数であった。傍観者でいられないという自覚をもったわけであり、このことだけでも、一つの教育効果とも言える。生徒たちの実感では、指名される回数が増えたとのことである。ただしこれは生徒たちの効力感に裏打ちされて積極的な意味をもつものである。一般には少人数学級は、むしろ苦手意識が強かったり自信がなかったりする生徒を支援することに有効性が期待されるものであるが、そのためには、大変なのではという見方が排除される必要がある。その条件を探るために、逆にこうした見方をもつ背景を分析することには意味があろう。

集団で行う音楽の合唱・合奏や、体育のチーム競技などについて、一般には少人数学級の弱点と考えられることが多いのだが、生徒たちはさほど不利を感じていない。一人あたりの力の出し具合いについての検討が待たれる。

20人学級の性格について深い示唆を与えるのは、「みんなが授業に参加していないと授業が成り立たないから、そういう面で、先生が勝手

表2　発言例「最初の印象」

<20人学級>

・半分になっちゃった時はビックリして、週番とかも回ってくるのが早いから、大変っていう面で、やっていけるかなと。掃除も同じ面積をやらなくちゃいけないから。

・半分になって、何か少なすぎるんじゃないか思って、不安なところもあったけど、少ないだけ、そういうところは40人学級とは違って何かまとまってたような気がする。

・少し不安を覚えたんですけど、楽しいなとワクワクしました。

・教室が広いと感じました。

・ちょっととまどいがありました。今までそういう体験もないし、そういうところで自分はいられるのかなっていう不安とか、そういう気持ちばかりで、でもクラスに入ったらいい体験とかもできるかもしれないし、自分の意見を出す機会も増えるんじゃないかなと思ったので、頑張っていこうというのを初めに思いました。それからくらすに入ると自分の意見を出す機会も増えたし、みんなと話す機会や、まとまりもどんどんよくなってきたんじゃないかなと思います。そういう点がよかったと思います。

・人数が半分になるから、授業中に発言とかがちゃんとできるようになるかとか、逆に少ないからみんな仲よくできるんじゃないかなと……最初の方は少なかったけど、だんだん皆増えていった。

・友だちとかの輪が狭まるっていうことだから、最初はやだなって思って、今まで40人とかってすごいクラスに机がいっぱいあって人がたくさんいて、すごい楽しい雰囲気だったのが、半分になるとすごいがらんとした感じで、これから大丈夫なのかなって。

・展示物とかも全然なくて人も少なくて、皆もああE組になっちゃったなという、ちょっと沈んだ感じになったから、ちょっと暗かった（家族から）。

・人数は変わってしまうけど、前の40人学級のように頑張れば／20人に人数減って大変だねって／家族に初め話した時にみんなビックリしてて、でも学習面とか私はちょっと苦手な部分があるので、生徒が減れば先生の授業をみる機会も増えるんじゃないかなということで、いいんじゃないって／うちのお母さんは、E組になって頑張ってって言われたんですけど、初めての経験でとまどいもあって、お母さんの言う頑張れみたいなことはできなくて、でも慣れてきたら20人とか意識しなくて40人学級と比較したらあれだけど、普通にいつものように過ごすことができて、そんな20人だからって意識することはなくて、普通にクラスとして過ごしてきた。

<30人学級>

・ぼくは静かな方がいい。30人学級になってからちょっと落ち着いたっていうか、ちゃんと生活できるようになった。

・元クラスはちょっとうるさかったけど、普通になった。

・少し寂しくなった感じ。

・（おしゃべりしない）それはちがう。盛り上がっていないわけじゃない。

・（40人とはパワーが）全然違う。

・やでした。

・クラス替えしたくない。

・最初はすごい嫌だったんだけど、結構結果オーライだったかなって、やだったけどまあ何とかなるか。

・（慣れるまで）あまりかからなかった／一週間くらい／しゃべっていくうちに溶け込んで、ああ慣れちゃったみたいな。一週間すごく長く感じた。

・教室が広くなって、走っても大丈夫。ものが全然少ないし。ロッカーの数が少ないし、あとハンガー掛けにハンガーが少なかったりして、変わっちゃったんだなあみたいな、少なくなったんだみたいなみたいな。

・机の数が減ったっのでちょっと教室が広くなった。そういうことしか。

・少なかった。

・教室広くて、廊下が空いていた。

・通路が狭く感じた。

・（感じが）変わる（数名）

・１列変わるとすごい変わるよね。

・（20人学級は）少ない／かわいそう／広い／寂しかったよ／物全部入れても少ないし、やっぱ小さい組って気がして。

に指したとして、たとえ間違えたとしても」という発言から描かれる指名と応答である。従来の学級では、解答を思いついた生徒が挙手をするという連鎖からやり取りが展開される。ところが、生徒を動員しないと続かない少人数学級では、正否はともかくも解答を得た生徒の発言だけでは成り立たない。つまり、まだ考えがまとまらない生徒も含めてやり取りに巻き込むことになるわけである。やや図式的に言えば、わかった生徒の発言がつながる従来授業に対して、まだわからない生徒もつながってしまう授業になる。このことが、いかに実現しうるかを探究することは、大きな意義を持つと考えられる。

主な発言は表3に示された通りである。

表3　発言例「授業場面」

＜20人学級＞	＜30人学級＞
・（発言は）遠慮しちゃう。目立っちゃう。 ・（話し合い）皆としゃべれるようになった。 ・（挙手）私はあまり手を挙げたことはないんですけど、40人だと6列くらいまであって、先生とかは適当に指名したり、みんなに手を挙げさせてその中から指名したりする感じだったけど、20人だと3列か4列しかなくて、先生の目がすごく行き届いていて、みんなが授業に参加していないと授業が成り立たないから、そういう面で、先生が勝手に指したとして、たとえ間違えたとしてもそんなに人数が多くないから、あまり緊張したりとか恥ずかしいとかあまりない。 ・（他人を意識）20人はそんなに思わない。 ・音楽の時間とかで歌うたったりすると、40人学級は人数が多いから声量が大きくて、授業とかで20人学級のE組が歌うと、ABより声が小さい。 ・40人クラスだと周りがたくさんいるから、自分の声が小さくても他の人がそのくらいだったらわかんないけど、20人クラスだと、一人一人がちゃんと声出さないとまとまんないから、た	・もう少し私語をなくして。先生の声がたまに聞こえないときがあるので。 ・授業でいきなり当てられちゃう。社会、英語とか。 ・すぐ一周回っちゃう。人数少ないから。 ・すぐ自分の番に来ちゃう。 ・（挙手）あんまり／数学はする／挙げない。 ・前は答えたい人答えろみたいな感じだったけど、手を挙げる人が少ないから。 ・勝手にしゃべる時もある。 ・手を挙げてくださいって言われちゃう。 ・（話し合い）グループ分け／国語。 ・先生がどうですかって言った時に、あんまり難しいっていう感じだと、40人の場合一人くらい挙がって、解決したんだけど、30人あまり手挙げなくて、あんまり手挙げないからその問題解決されないっていうか、そんな感じで。あと、授業中おしゃべりってあるじゃないですか。あれが何かうるさくなったっていうか、そんな感じがしました。 ・（挙手）ちょっと少ない気がして、普通はわかるんだったら結構挙がるんですけど、時々わかんないっていうか、ちょっとつまるような、そんな感じて挙がんなかったり、あと、数学みたいに考え方がいろいろあるやつだと考え方の種類が少ないっていうか、みんな同じなのかなみたいな、そんな感じがしました。 ・理科は班の数が少ないから、先生がよく来てくれて、何か気軽に聞けたりして、実験がどうのこうのと言って先生に質問ができたり、詳しいことが聞けたりして、そこがよかったです。 ・あまりやっちゃいけないんだけど授業中おしゃべりしちゃう時に、E組には全部聞こえたらしい。あと席替えする時に、自由じゃないことが多くて、くじ引きとか決めて、最後くらいに自由になることが多いんですけど、自分で何か友だちができやすいと思うんですけど、親しみやすいと思うんですけど、友だちと離れちゃったので、まわり知らない人だから、近くの人があまり知らない人が多いていうか、あまり親しくないのかなあって感じがして、おしゃべりとか少ないし、あと理科の授業で、

ぶん40人クラスのときより声大きくなるし、やる気とかも大きくなると思う。

・（声の大きさは）４人だと、音楽室で練習していると、先生とかが入ってきて、個別指導みたいに、こうやると声が大きく出るとか細かいところまで指導してくれたから、そうすると声が出るようになって、40人で歌っていたのを20人にいきなり変わると音量が、まわりに感じる音も最初は違ったけど、一人一人が大きい音出せば、そんなに変わらないと思った。

これ先生から聞いたんですけど、少ないから授業しにくかったので、自由な人と組ませたって聞いたんですけど。

・少しくらいおしゃべりがあっていいんじゃないかなって、30人の方が40人よりうるさくなった感じがするんですけど、ちょうどいいっていうか、40人だと何言っているかわかんないし、かといって20人だと聞こえちゃうから、ちょうどいい30人がちょうどいいグループじゃないか。

・気軽におしゃべりできちゃうから、先生が注意しても止まらないっていうか、ちょうどいいうるささっていう感じなんですけど、長く続くっていうか。

・一時間でも全員指されるよね、社会とか。

・私、手を挙げてるのに指名されなくて。

・（挙手であたる確率は）増えた（複数）

・○○（先生）は絶対指してくれない／そう／頑張って挙げてるけど／怖い顔して挙げてるけど。

・まん中のまん中のまん中が一番ダメなんだよね、ずーっと手挙げてたのに。

・（当たりやすい席）まん中の前（複数）

・手挙げたら必ずささる。・ウチもそれある。

・え、でも端の２番はダメだったよ。

・○○さあ、手挙げ過ぎなんだよ。私みたいにまれにしか挙げないと／関係ないよ。

・実験用具が一人一個くるからいい／そうそう／あれいいよね／あれいいよ。

③授業以外の活動

授業以外の活動については、多くの発言は得られなかった。休み時間などに学級を超えた交流がどのくらいあるかを尋ねたが、休み時間は忙しいという印象であった。

主な発言は表４に示された通りである。

④友人などの人間関係

友人を持ち仲よくなることと、数人でつくる「グループ」にどう対処するかということについては、多くの生徒がかなりの強い関心をもち、学級集団をどの規模で構成するかということも、この問題と不可分であった。その点で、グループができにくいことを理由に20人学級のよさを述べた生徒が何人もいた。

だが、面接においては「仲がいいよね」といった同調性を含む発言も多く、関心の強さは明確にわかったが、集団面接では牽制されて言語化されなかった点もある可能性は残される。

主な発言は表５に示された通りである。

⑤生活・学習環境

少人数学級で生じる教室空きスペースについて問うたが、後ろに空きができるはずのない30人学級でも広くなったという発言があり、知覚的空間の余裕は客観的余裕にまさるものと思われた。他方で、20人学級については、教室空間の余裕は寂しさとも受け取られていることが伺えた。

理科実験における器具の専有的使用については、満足度の強い発言が多くなされた。そのことも含めて、自分の持ち分に関する発言がいくつか見られ、少人数生活集団の利点が示唆されていた。

主な発言は表６に示された通りである。

表4　発言例「授業以外の活動」

＜20人学級＞	＜30人学級＞
・（球技大会）今まではクラス対抗だったけど今回はチームに分けるからクラスを混ぜて。 ・机の周りとか空いているから。	・休み時間の雰囲気が全然違かった。 ・しゃべっている／世間話をしてる。 ・でも前期は教室移動があったので、あまり話せなかった。休み時間も。 ・（休み時間）普通、次の授業の準備したり忙しいんですけど、普通におしゃべりしてたり、あとクラス替えしちゃったので、他のクラスの所に遊びに行ったりして、元の友だちと話してたりとか、そんな感じのことが多かったです。 ・バレーボール、ほとんど全員でやってるよね。

表5　発言例「友人などの人間関係」

＜20人学級＞	＜30人学級＞
・友だちの意見なんですけど、今度クラス替えがあるんだって言ったらえっと言われて、22人と36人と42人なんだけどと言ったら、22人がいいなって言われて、どうしてって言ったら、友だちの人数が少ないから仲が深まると思うって言われて、そういういいところもあるだろうし、私はまん中36人がちょうどいいかなって思っているけど、友だちが言ったように、20になったら、仲が深まるんじゃないかと思いました。 ・40人だとグループとかできちゃって、話せない人もいるけど、20人になるとグループとか全然できなくて、みんなとよくしゃべれるようになる。 ・22人学級だと42人学級よりいろんな人と話す機会が増えるっていうか、いろんな人の気持ちとかその人の好きなこことか、そういういろんな人の得意とかいいとことかがわかったり、今までだと42人だとその人と話す機会とかが少なくなっちゃったりして、その人のことについてよくわかんないってことがあるから、22人学級だとそういう部分かったんじゃないかなと思うし、	・前クラスが一緒だった人は新しいクラスになってあまり話さなくなったりとかしてしまったんですけど、けど、仲のいい人はいます。 ・クラスの人数が少ないので、１学期よりは静かだと思うけど、でも落ち着きがないというか、グループで集まって話してたりとか、してるんで、ちょっとみんな授業中も。 ・それより、後ろの人と話してたりとかが多い。 ・でもクラスの人の仲は結構いいみたいなんで、クラスとしての関係というか、そういうのは結構いい。ぼくはちょっと距離をおいているんだけど、休み時間とかいいし、そういうところはいいと思います。 ・友だちができやすいっていうか、多いと全員にあんまり親しみがないっていうか、そんな感じなんですけど、ちょっと減ると、馴染みやすいっていうか気軽に話せたりして、温かい感じになったみたいな。あと男子も少なくなったので、最初は多くてあまり関わってはいない男子とか、あと話したことないとか、だけど話してああこの人いい人なんだみたいに相手のことをよく知ることができるっていうか、そんな感じで、何かクラスがフレンドリーな感じ。 ・初めの方で、知らない人がみんないるから、まずみんなで自己紹介して、友達づくりっていうかそんな感じのして、気がついたら友だちたくさんいたみたいなそんな気が私はしたんですけど。他の子もなんか友達が多くなったとか、このクラスってフレンドリーだよねとか言って、何かそんな感じで周りのこと気軽に話せるようになった、そんな感じがします。 ・（女子が男子とも）そんな感じです。 ・（グループ）できるんですけど、気がついたら、いつも同じメンバーじゃないっていうか、ときどき一人入ったり、違う人が入ったり、みんな話に加わりやすかった。小さい集団もいるんですけど、明日になったら固まって大きな固まりになって、次になったらまたバラバラになってみたいな感じで。

でも42人っていうのもみんなとしゃべれるからいいんじゃないかなという部分もあるし、でもどっちもいいところあるんじゃないか。

・20人学級は人数が少ないから、40人学級は今○○さんが言ったようにグループとかあったんですけど、20人学級ではみんなとまんべんなく仲よくできる。そういう点ではよかった。

・（入れないグループ）いつも過ごす人たちが決まっているんですけど、こういう話し合いをしましょうといったら他のグループとかが入ったりして話したり、こんな感じなのかなあって話したり、ことができたりそんな感じです。

・女子は仲いいよね／うん。

・何か一つのまとまりの人数多くなってない？

・最後の方はみな合体して。

・大体はね／大体／皆じゃない／全員だと多すぎだもんね。

表6　発言例「生活・学習環境」

＜20人学級＞

・荷物が多いので置きたいんですけど、E組になったら荷物とか置けると思ってたんですけど、先生がE組だけ使うのはダメだからといって、他の40人学級と同じように。本当はたくさん余ったスペースを使いたかった。

・みんなで集まる、例えば円になって集まる時とかに机がすごく邪魔になる。40人だったら邪魔だけど、20人だったら例えば女子だけだったら10人ちょっとくらいしかいないから、みんなで話し合いをする時に後ろのスペースを使ったりとかそういうことに使える。

・授業中とかに理科の授業の時に、最初は前の方に全員集まってたんですけど、3学期くらいから1テーブルに4人のところを2人にして、実験が、附属中は実験が多いんですけど元々、実験で、4人だと自分のやらないところとか見逃しちゃうところとかあるんですけど、2人でやってると女子同士とか男子同士とか好きな人同士でできたので、自分の意見が出しやすかったし、実験とかも自分で考えてやらなきゃいけないから、そういうところは充実していました。

・標本とか限りがあるものを他のクラスだったら2人で1個とかのものを、一人ずつ1個とかで、独り占め。

・仲のいい人同士で組んだので、わかんないところとかも聞き合ってできる。

・ロッカーが大きければいいな。普通のバッグが大きくて荷物が多いので、それプラス習字セットとか入れると一杯になっちゃうから、ロッカーがもうちょっと大きかったらいいなと思う。

・前まで部活のロッカーがあったんですけど、新校舎に来てからはないみたいで、部活の道具が一番多かったので。

＜30人学級＞

・物がないからその分広かったから、やってはいけないけど走っちゃったり、よく走ったりするので、その辺が何か便利っていうか、あまり物を置かない方が、少なすぎてもE組みたいになっちゃ寂しいけど。

・鬼ごっこはできる。

・逃げ場がある／一人一人のこの部分が。

・（鞄）40人だと狭くて絶対置けないよね／蹴られそうだよね。

・（縦の机数）変わってないんだ／狭いっていう意識でみんなが前に詰める／でもウチ一番後ろの席の時に6番目の時にロッカーきつくて座れなかった／交通量が多いから。

・中にロッカーがあったんだよ／あそうだ。

・教科教室制じゃないほうがいい（複数）

・移動しなくちゃいけない／面倒くさい／やだ。

・だって廊下が混む／スゴイ混む。

・オープンスペースできたからいいって言ってたけどさ、オープンスペース入ったら出られない／ハンガーまん中にあるけどさ、邪魔だよね。

・よく先生優先だからって言う人いるけどさ、先生優先でそれで遅刻して怒られるなんて何だ。

・着替えてから行くと超遅れるもん体育長引いて。

・机はきれい／ちょうどいい／だけど中に物入れちゃいけないとかいうの／やだ（複数）

・教科教室制やめて、マイデスク。

表7　発言例「今の選好・総評」

＜20人学級＞

・E組は、例えば英語だったらもう一回やり方をやってみたい人はどうぞとか、理科だったら40人だとすべての机がいっぱいになってしまうけど、E組は二人ずつとか三人ずつとか一人の机を使って授業が受けられたりとか、E組だけの特典じゃないけど、クラスとかいてもE組の人数に慣れちゃったりとかして、逆にA組とかに遊びに行ったりとかすると、人数が多いなとか、元はそのクラスだったのにE組に慣れると多く見える。

・クラス替えをやる前は、何か40人学級の方が人数が多くて、そっちの方がにぎやかでいいなと思ったけど、20人学級になってみると、さっき○○さんが言ったみたいに、E組でしかできないこともいろいろあったから、2年生になって40人学級に戻るとなると、人数少ない方がいいなと思ったりするんではないかと思う。

・40人クラスだとあまり知らない人、関わらない人がたくさんいて、話す機会もなくて、そういう人がたくさんいたんですけど、20人学級になって、一人一人と関わることができて、仲がよくなったっていうか、団結力が深まりました。逆の面では、逆の面では、40人クラスの方が、やっぱ、どうだろう。

・40人だとグループができちゃったところが多くて、20人だとグループができないで、20人で一つのグループでそれがいいと思う。

・40人学級はグループがたくさんできるけど、少人数だと、多少のグループはできるけど、いろんな人としゃべれて楽しかった。悪かったところっていうか、周りのいろんな人と仲よくはできたけれど、もうちょっと他の人とも関わりをもちたかった。

・40人学級の方は周りの人と仲よくすることはできないけど、軽く話したりとか、グループはできてしまうけど、席が近かったりするといろんな人と話す機会がふえると思って、22人だと一つのグループということでなく周りの人とちょっとしたことでも話せるし、席替えとかをしても同じとは言わないけど身近な人に40人だと1回くらいしか近くにならなかった友だちとかもいるけど、22人だと同じような仲間と一緒になったりして、仲が深まる。意見とかは、42人の悪いところは、すぐうるさくなってしまうところと、あと授業とか、22人だと集中して、あと24人だと、たくさん意見が出るんですけど、22人で出なかった意見も44人だと出るところもあったり。

・グループが、42人だといくつもできちゃって、まとまりっていうのがよくないんじゃないかっていうのは思ったんですけど、でもやっぱり22人クラスは、みんなまとまりとかも、グループはそこまで多くなかったし、でもやっぱりグループがあんまりできなかったからみんなまとまりがあって、クラスの集団行動

＜30人学級＞

・40人。結構友だちつくるの苦手なんで、親友みたいなのが結構少ないので、だからそういう人が少なくなるとちょっと厳しいので、出来るだけ仲いい人が多い方がいい。

・40人。30人だと一年に仲よくできる人が、人数が40人クラスよりも少なくなっちゃうし、できるだけ友達は多い方がいいし、だから40人の中でいっぱい友だちを作りたい。

・40人の方がいいんですけど、理由は、前期だったからというのもあるかもしれないんですけど、行事とかで団結できるのが、40人の方が団結力が高いっていうか。

・私も42人の方がいいんですけど、30人の方も結構まとめやすいのはあるんですけど、行事とか40人の方が盛り上がるし30人と違って10人分のいろんな人が集まれるので、結構いいイメージがある。

・どっちでもいい。私うるさすぎるより静かな方がいいけど、うるさいのも嫌いじゃないし、だからどっちでもいい。

・30人。20人だとやっぱり寂しいから、できるだけ明るい方がいいし、40人だと友だちできにくという印象があって、30人だと、今のクラスで過ごしていいクラスだなと思っているし、友だちができやすいっていうか、親しみやすいっていうか、みんなのことよく知れて、いいクラスっていうか明るいっていうか、そんな感じ。

・(明るいクラスとは) いじめがないっていうか、いじめっていうか仲間はずれっていうか、40人クラスだとやっぱできちゃうし、できても人数が多すぎて、先生たちも

も42人学級の時に比べれば速いし、仲いいんじゃないかと思いました。逆に難しいというのは、私は学年で話したことない人も何人もいるし、何十人単位かもしれないんですけど、でも42人だとそういうんだといろんな人と話す機会が多いし、話したことない人も話せるんじゃないかなって思って、22人だと限られた人も多くなっちゃうんじゃないかなと思って、そういう部分はむずかしいんじゃないかと思いました。

・22人クラスでよかったなと思うところは、理科とかの実験で器具が一人で使えたり理解が深まったり、あと音楽の授業。友だちとかの面でもいろんな人が関わってきて、そういうところはいいと思うんですけど、悪いところっていうと、目に見えるものじゃないんですけど、週番とが早く回ってきたりとか、委員会とか係とか、生徒の心の負担っていうと重すぎるんですけど、そういうのが大変だなと思うところはあります。

・E組のいいところは、皆仲よく男女ともに過ごしたりできるし、グループも全然できないから、いいです。あと、理科の時とか一人一人器具とか使えるから、ちゃんと学習ができるし、充実した日々が送れました。逆に悪いところは、授業中に手挙げる時に自分の意見がなかなか言えなくて、なかなか進まなくて困っちゃう時とかあるから、そこが問題点だなと思います。

・40人クラスだとあまり関わることが少ないかもしれないけれど、自分を除いて39人とかのたくさんの個性が知れて、少しでも関われるからたくさんの人と出会えて、逆に20人クラスだと、個性の数は少ないけれど、その分ていうか仲が深まって、それがいいところだと思います。週番とか委員会とか一人何役もやらなきゃいけないっていうのは、20人クラスの大変なとこでもあるんですけど、それをやることによって、経験とかが他のクラスよりも多くなるっていうか、それは別に、難しいっていうかよくとればいろんなことができるってことだと思います。

・40人学級の時は、歌うたう時とか声出さなきゃいけなかったりした時とか面倒くさいと思ってたときもあったけど、E組になってから、一人一人が声を出さなきゃいけなくて、自分、クラスの一員として頑張らなきゃいけないっていうのはわかったから、面倒くさいと思うんじゃなくて、そのこと当たり前のようにできるようになったのが、E組のいいところだと思います。あとは、人数の違いで友人関係が違ってきたりするところは、それは仕方ないと思うけど、でもクラスの人数の多いところは、そのクラスの中でいろいろな人としゃべれるしいいんだけど、人数が少ないと、クラスの中でしゃべる機会っていうか、ないから、食い違ってくる。人間関係ってのはは難しいと思う。

・でも今は、終わりの方は、20人とかだと人が集まりやすいし、何個もグループができても、グループ同士の人数とかはそんなに多くないし、みんなで仲よくできるから、逆に40人のクラスに入った時に、人が多いと。

きっと、こう言ったらおかしいけど構ってられないとか、相手にしてあげられないっていうか、そんな感じだろうって。30人だと自分のことをみんなが知ってくれているからっていう気がしました。

・席替えとかした時に40人だと、ならない人っていうのがたぶん出てくると思うんですけど、30人だとこの前なったよねとか、確率が高くなるっていうか、親しみやすくなる。

・30人。

・30人でちょうどいい／○○さんと同じ。

・（ちょうどいいとは）やっぱ多すぎでもなく少なすぎでもない、広さ。

・40人だと30人より授業中とか手を挙げる人の割合が多いから、みんなが挙げていると、自分も挙げた方がいいのかなと思うから、30人のクラスになってから手を挙げる回数が減った気がする、自分が。

・手を挙げる回数が多くなりました。40人クラスだと、発表している時に見ている人の目とか多くてこわくって、発表できなかったんですけど、30人だとあまりプレッシャー感じない。

・40人だと無駄に多いみたい。

・今となっては多すぎる／慣れ。

・これから2年生になって40人クラスやだもん／ウチもやだ。

・でも22だと逆に少ない／少なすぎる／32が一番／ちょうどいいよね。

・一つ列がなくなって。

⑥今の選好あるいは総評

上述したように、特に20人学級では顕著に20人学級のよさを指摘し、現環境への愛着を示唆する発言が多く見られた。同時に、友人との関係づくりを根拠にして判断を述べるものも多く見られた。またこの話題では各人が長い発言を行っていたのも特徴である。

少人数学級の評価にはさまざまの成果という客観的指標が求められるのは当然としても、生徒たちの感じる心地よさと安心感というものを指標化する必要が感じられる。

主な発言は表7に示された通りである。

3　結果のまとめ

(1) 生徒のほとんどの行動には、友人との関係が不可欠の影響要素となっていることが、どの側面の話題にも友人との関係づくりが言及されたことから、明確にくみ取れる。

(2) 授業については、自分の参加と周囲の生徒や集団全体の参加との関係を意識しながら対処している。20人学級において発言が当初乏しかったのは、40人学級で築いた流れの修正を余儀なくされたためであった可能性がある。

(3) 環境への認知を含めて新学級への認知には、生徒特有で、いわゆる大人の視点では浮かばない見方のある可能性が示唆された。

(4) 環境の変化に対する生徒の不安は少なからずあった。クラス替えに対しては、不安だけでなく、明示的・暗示的な学級ルールの作り直しに伴う一時的混乱もあったかもしれない。

他方で、生徒たちはどの学級環境にも時間をかけて柔軟に適応していく様子が伺えた。ただし思春期の子どもたちとして、学習の側面と発達の側面との両面からの評価が必要になろう。

V　今後の課題

一つの課題として、少人数学級における友人関係の質の分析が示唆された。

授業中の発言は、同級生の存在が抑制にはたらくこともあれば、逆に同級生の行動に触発されて促進されることもある。学級規模への選好も、いろいろな友人と知り合うか少数の友人とじっくりつき合うかの選択を重ねて判断される。また活気のある集団に属することを求めながらも、騒々しい集団は避けたいと思う。友人関係をめぐるジレンマ状況が学級生活への評価にも関わるようである。

ところで、生徒たちは集団に対するある種の信頼感をもっている。「40人の場合一人くらい（手が）挙がって解決したんだけど」との発言にも見られるように、40人学級にいるときの居心地のよさは、集団に埋没できる安心感であろう。40人学級だと騒がしいと言いながら、「数が多いと騒がしいけど注意する人もいる」という経験則を述べた生徒もいた。このことは、ある程度の学級規模を求める気持ちにつながっている。こうした生徒特有のとらえ方が得られたことは、面接調査の効力の一つといえる。

少人数学級での生活を検討するには、その学級でどういう友人関係を築きうるかの評価が必要だということである。だが、多人数学級での友人関係において生じていることをとらえるのと比べて、質的関係ともいえる少人数学級での友人関係をとらえるのはそう容易ではなく、工夫を要する。思春期の子どもにとっての学級という観点も不可欠であろう。

もう一つの課題として、授業への参加と生徒固有の学習ペースや学習スタイルとの関係を明らかにすることがある。

以下は、本研究プロジェクト内で筆者が提示したメモの抜粋である。

「20人、30人学級での授業を観察しながら、何かリズムがずれると感じるところがありました。でもそれが何なのかわかりませんでした。今年度になって元の40人学級に戻り、授業での歯切れのいいやり取りをみて、もしかしたらこの速いテンポは40人を生かすために培われたものなのかなあと、ふと思ったりしました。しかし、このテンポ、前時間の復習や生徒たちが競って

アイディアを出す場面、つまり知識を問う場面では抜群ですが、ちょっと立ち止まって考えてみようよという場面で、ちょっと待って！速すぎるという感じをもってしまいました。そこは、もしかしたら少人数学級の強みにつながるのかもしれません。」（中略）「生徒との面接でも、40人の時は先生の問いかけに『うーん』と考えていてもその間は誰かが答えてくれているからいいという声がありました。20人の時はすぐ答えなきゃと焦るということでもありました。20人とのやり取りには時間をとる必要があるということは、時間をしっかりとるべき発問内容には、（20人学級では）自ずとそれが満たされることとなる（以下略）」

少人数学級が問題を解決するというよりも、少人数学級が問題解決のための好条件をつくるということを基本的な観点として、上記の視点を用いながら、さらに少人数学級の適切な検討を行うことが、今後の課題となっている。

謝　辞

本研究の面接調査を実施するにあたり、３学級25人の生徒の皆さんに協力していただいた。また調査の設定のため関係教職員のご尽力をたまわった。厚く感謝申し上げる。

文　献

馬場久志・萩生田伸子・首藤敏元・志村洋子・真武公司・石川泰成・萩原哲哉・野村真一・大河内範一・大井敏彰・八坂和典・清水利浩・塩﨑陽子・安藤義仁（2007）平成18年度文部科学省「教員配置に関する調査研究」への取り組み－少人数学級の教育効果と教員・生徒の情意・行動に関する研究（１）．研究紀要第43集，37-52. 埼玉大学教育学部附属中学校

教職員配置等の在り方に関する調査研究協力者会議（2005）今後の学級編制及び教職員配置について（最終報告）．文部科学省.

文部科学省（2008）平成20年度学校基本調査速報．文部科学省.

（2008年９月30日提出）
（2008年10月17日受理）